

## 「博士論文」 可否査定資料

申請者 同志社女子大学嘱託講師  
職・氏名 森下 訓子

---

学位の名称 博士（日本語日本文化）

---

論文名 様態・量・程度を意味する語彙の統語的特性

---

審査委員 主 査 村木新次郎

---

副 査 吉野 政治

---

副 査 石井 久雄

---

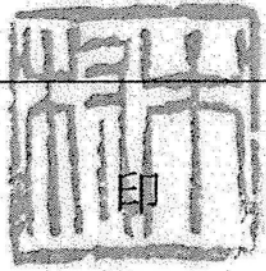


審査結果 合

2010.2.2 日本語日本文化専攻博士後期課程委員会 承認

2010.2.2 文学研究科博士後期課程委員会 承認

博士學位論文審査結果報告書

2010年 2月 2日

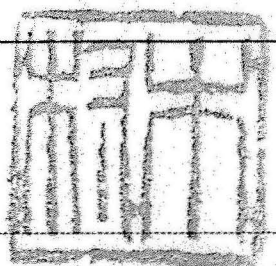
学 位 申 請 者	森下 訓子		
審 査 委 員	主 査	村木新次郎	
	副 査	吉野 政治	
	副 査	石井 久雄	
<p>この論文は、現代日本語の「様態・量・程度」をあらわす単語の文法性を、毎日新聞約20年分をコーパスとして、それらの実例を調査し、それに考察をくわえたものである。「様態・量・程度」をあらわす単語は、語彙論上も文法論上も多様であり、あつかいの難しいものである。そうした、困難な課題に果敢にとりくんだ野心作である。各種の辞書でのあつかいも統一性を欠き、品詞についての情報があいまいで、辞書がはたすべき規範性において、きわめて不十分な状況にある。本論文は、大量のデータベースを活用し、文法的な側面から、それらの実態を調査したものである。今後の辞書作成において、あるべき文法的な情報を知るための貴重な資料を提供したものととして価値をもつ。</p> <p>もとより、辞書は言語事実を反映し、規範となるべきものである。しかし、辞書の記述が言語現象を忠実に反映しているという保証はない。著者の報告は、辞書の批判には及んでいないが、結果として、辞書の文法性の記述の問題点を明らかに出したことになる。著者は、実例を重視し、言語の実際の使用から客観的な結論をみちびくという、研究の姿勢をつらぬいている。こうした言語事実の実証的な記述は、研究の客観性を保証するものであり、かつ、特定の言語現象にかたよることなく、大量の事例をあつかっている。各品詞の典型とそうでないものをきちんと整理したことも評価できる。提示された調査結果は、今後の辞書編纂や言語教育(学習)にも有益であり、そのための貴重な資料を提供しているといえる。</p> <p>著者の研究に関連する領域に対する理解はおおむね確かであり、日本語学(語彙論・文法論)に通じていることが随所にうかがわれる。論文は全体の構成において確固たる形式を整えている。専門用語の使い方もおおむね妥当であり、特に問題はない。</p> <p>本論文は、博士(日本語日本文化)(同志社女子大学)の学位論文として十分な価値を有するものと認める。</p>			



博士學位論文内容要旨

2010年 2月 2日

学位申請者	森下 訓子	
審査委員	主査	村木新次郎
	副査	吉野 政治
	副査	石井 久雄



(要旨)

「辞書は鑑でもあり、鏡でもある」といわれる。「鑑」は、規範となるものを意味し、われわれは、辞書の記述を規範としてとらえている。一方、「鏡」は実際の言語現象を写すものであるという意味である。本研究は、辞書に記述されている文法的な情報（それは、品詞に集約される）が現実の言語現象を正しく写し取っているか否かを検証したものである。

本研究の構成は以下の通りである。

序 章

- 第一章 様態・量・程度を意味する語彙の統語的特性
- 第二章 連用用法で「-に」「-で」の双方の語形をもつ語彙の一特性
- 第三章 洋語名詞の形容詞的用法
- 第四章 近代日本語文法研究における単語認定と品詞分類について
- 第五章 むすびと今後の課題

本研究は、様態・量・程度を意味する語彙 459 語 (漢語：241 語、和語：218 語) をとりあげ、それらの統語的な特性を問うたものである。対象にした単語は、「旧来」「もより」・「一堂」「ひまし」・「無断」「まえむき」といった様態・量・程度を意味するものである。これらの単語は、総じて、辞書などでは、名詞としてあつかわれている。しかし、それらが本当に名詞であるかどうかを実際の使用を調査し、吟味したものである。その結果、調査対象にした単語の多くは、名詞の特徴を欠き、連体詞や副詞や形容詞としなければならないことを明らかにしている。

当該語の調査対象としては、新聞 (『毎日新聞』 約 20 年間分) を選んでいる。新聞は、現代社会を生きるうえで必要不可欠な言語情報を提供している媒体である点、現代の書きことばを代表する資料とみることができる点、没個性的な特徴があり、個人による使用の偏りを消すことができる点、データベースの利用により大量の調査が可能である点、などの特徴があり、本研究の対象として適切であるという。

第一章では、まず、本研究との類似点を多くもつ、先行研究である水谷静夫・星野和子 (1994) の問題点を検討している。水谷らの品詞分類では、形態的な基準が重要視されているが、本研究は品詞分類において単語の統語的な特性を重視する立場をとる。水谷らの分類は、さまざまな基準が混在しているという問題点もあるとする。本研究は、単語の統語的特性を優先させ、その後、形態上の特徴を見るという立場である。



さて、第一章では、当該の単語が名詞でない（「文中で主語・対象語（目的語）として用いられていない」）ことを確認し、文中でどのようなはたらきをしているかを調査し、どの品詞に所属させたらよいかを提案している。

「旧来」「もより」「絶世」といった単語は、主語や目的語（対象語）として使用されることはない。「旧来の（考え）」・「もよりの（地下鉄駅）」「絶世の（美人）」のような形式で名詞にかかる連体用法として用いられる。これらの単語は文の中では名詞を修飾する連体の機能しかもたないため連体詞としなければならないとする。

また、「一挙」「ひまし」「口々」「のっけ」といった単語も、主語や目的語（対象語）としての使用はない。「一挙」は、「一挙、（7点を追加した）」「一挙に（14施設で導入する）」、「日増しに（定着していく）」「口々に（言う）」「のっけから（痛いところを突いてきた）」のように、専ら連用用法として振る舞う。「一挙（に）」「ひましに」「口々に」「のっけから」という語形をとり、連用の機能しかもたないため、副詞としなければならないとする。

さらに、「無断」「故意」「まえむき」「てづかず」といった単語も、主語や目的語（対象語）としての使用がない。たとえば、「無断」は「無断の（海洋調査）」「（政府遺跡保護局には）無断だ」「無断に（引き出す）」のように、連体用法、連用用法、述語用法で使用されるため、形容詞としなければならないとする。「故意」「まえむき」「てづかず」なども同じ特徴をもつことを指摘している。

このような単語が、少なからず存在することを明らかにしている。さらに、それらの品詞として典型的な統語的特性をもつものばかりではないことを確認する。それぞれの品詞の典型的な統語的特性をもつ単語もあれば、複数の品詞の統語的特性を併せ持つ中間的な単語もあり、それらが連続していることをしめしている。こうした中間的な単語群をタイプ分けしている。

調査は、漢語と和語とを分けて行い、それぞれの分析結果をしめしたうえで、漢語と和語の異同を吟味している。その際、語形のゆれとヴァリエーションについても言及している。

日本語研究の世界では従来から、ある単語が複数の品詞を兼務することがあまり話題にならなかった。本研究では、複数の品詞を兼務する単語について言及している。

第二章では、本研究での調査結果から、対象とした語が連用用法をとる際、「-に/-で」の双方の語形をもつ単語（「随所〔に・で〕決める」「頭ごなし〔に・で〕怒る」のようなもの）について整理している。これらの単語は、辞書で名詞とされていながらも、連用用法（副詞的用法）の使用例が示されている。ただし、多くは説明がない。また、その際、「-に」の語形について取り上げられることはあるが、「-で」の語形について、さらには「-に」と「-で」の双方の語形について触れられることは少ないという。

これら「-に/-で」の双方の語形をもつ単語の特徴として、連体用法をあわせもつ単語が多く、連用用法のみの単機能の単語ではないものが多いことを指摘している。さらに、和語に限定して「-に/-で」の双方の語形の異同からタイプ分けを行い、意味の特徴づけを試みている。

第三章では、洋語名詞を取り上げ、形容詞的（「-な」の形式を添えて名詞を修飾する連体用法で代表させる）に用いられる現象について報告している。取り上げた単語は、「ライブな同伴者」「エコロジーな選択」などのようなものである。このような単語のタイプには、原籍（借用もと）での品詞性に着目すると、原籍で形容詞の用



法をもつタイプと原籍で形容詞の用法をもたないタイプに分かれる。調査結果では新聞紙上において日本語の中で名詞として扱われている洋語が形容詞的用法で用される場合、原籍に即したタイプの使用の多いという。一方、原籍で形容詞の用法をもたず、名詞が形容詞化したタイプの使用はさほど多くなく、また、中には臨時的な使用だと思われるものもあることを指摘している。原籍で形容詞の用法をもたない名詞の形容詞化は現代日本語の書きことばにおいては、受け入れ途中であるという。この受け入れ途中であるといった中間段階を示す現象として、名詞と形容詞の張り合い関係において関与する単語の存在、および形容詞接尾辞「-的」を用いて、「X 的な N」と言い換えができるものとそうでない単語の存在があげられる。

第四章では、本研究で問題となる品詞の各要素である「単語」についての捉え方および品詞認定について、近代日本語文法における主な研究者の立場を概観している。研究者によって、単語の認定の仕方はさまざまで、現在も統一された理解はない。大槻文彦や橋本進吉は、単語認定において助詞と助動詞を単語として認める立場をとった。また山田孝雄、渡辺実、そして日本語研究者でない、ローマ字文の分かち書きから単語を捉えようとした物理学者の田丸卓郎や英語学者の宮田幸一は、いわゆる「助動詞」を単語の部分とみなし、いわゆる「助詞」は単語であると認める立場であった。

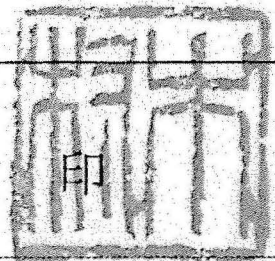
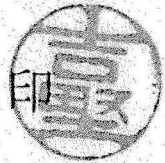

以上のような立場に対して、本研究では「助詞」や「助動詞」の多くも単語の一部（原辞＝形態素に相当する）であるとする松下大三郎の立場を支持し、さらに鈴木重幸の立場による、「単語は、基本的には、語彙的なもの（内容）と文を構成する文法的なもの（形式）との統一体である」という単語認定に基づき、本研究で対象とした単語群の統語的特性を問うている。「助詞」や「助動詞」は語彙的な意味をもたず、語彙的な意味をもつ単語の部分として、文法的な形態素としてのみはたらいっている、単語ではないとする。

品詞認定には、意味的な基準、統語論的な基準、形態的な基準からの分類があるが、筆者はすべての単語が備える統語的な特性を他の分類基準に優先させる立場から分類をおこなっている。これがあるべき品詞認定であると主張する。



博士學位論文審査結果要旨

2010年 2月 2日

学 位 申 請 者	森下 訓子		
審 査 委 員	主 査	村木新次郎	
	副 査	吉野 政治	
	副 査	石井 久雄	
論 文 題 名			
様態・量・程度を意味する語彙の統語的特性			
<p>この論文は、現代日本語の「様態・量・程度」をあらわす単語の文法性を、毎日新聞約 20 年分をコーパスとして、それらの実例を調査し、それに考察をくわえたものである。「なげやり」「かたどおり」「率直」「あしませ」「これみよがし」「二束三文」「直々」「唐突」などが対象とした単語である。名詞や動詞に比べて、「様態・量・程度」をあらわす単語は、語彙論上も文法論上も多様であり、複雑で、あつかいの難しいものである。この種の単語の整理には苦労が予想される。そうした、困難な課題に果敢にとりくんだ野心作である。これらの単語群は、多くは、文の骨格をつくる主語・補語・述語などの主成分としてではなく、もっぱら、規定成分や修飾成分などの二次的副次的な成分として用いられる。この種の単語は、統語上の使用において揺れがめだち、かつ形態上の揺れも多い。各種の辞書でのあつかいも統一性を欠き、品詞についての情報があいまいで、辞書がはたすべき規範性において、きわめて不十分な状況にある。本論文は、語彙論上かつ文法論上、不安定な状況にあるこれらの領域の語彙をとりあげ、大量のデータベースを活用し、文法的な側面から、それらの実態を調査したものである。今後の辞書作成において、あるべき文法的な情報を知るための貴重な資料を提供したものである。</p> <p>副詞は、従来から品詞論のごみ箱と言われてきたが、名詞もまたごみ箱と言ってよいものであり、名詞とみなされている単語群にも、名詞らしからぬものが少なからず存在すると著者は指摘する。一般に、日本語の名詞は、問題のない品詞と思いきざされているようであるが、しかし、それは正しくない。</p> <p>名詞のように思われている単語で、名詞とは異なる品詞（連体詞・形容詞・副詞）に所属させるべきものが多数見出され、それらが具体的にどのような単語であるかを指摘したことは、本論文の最大の貢献である。「故意-」「前向き-」「てづかず-」は形容詞であり、活用の体系をもっている。また、「日増しに」「口々に」「のっけから」は副詞であり、「なけなしの」「もよりの」「遠来の」は連体詞であるとする。これらは、いずれも名詞の特徴をもたないことを実例によって確認</p>			



している。また、複数の品詞の特徴をあわせもつものの指摘も重要である。著者は、この現象を品詞の兼務という。日本語の辞書では、この品詞の兼務について、従来、あまり注目されてこなかった。英語や中国語では、いくつもの品詞を兼務する単語が多く、単語の多品詞性は常識である。しかし、日本語の世界では、ある単語がひとつの品詞に所属するという暗黙の了解があるかのようである。当該の単語が、ある品詞の典型におさまらず、さまざまな変異体をもつこと、各品詞の境界が離散的で鮮明に線引きできないこと、品詞間の関係が相対的連続的であることを具体的に示したことも、本論文の成果である。

このような報告は、水谷静夫・星野和子(1994)にあるが、そこには、単語を品詞論上、分類するための指標が数多くしめされているものの、意味論上の特徴、形態論上の特徴と統語論上の特徴が混在しているとし、単語の品詞の区別には、文法的特性が問われなければならない、その単語の文法的特性は統語論的な特徴を優先すべきであると著者は主張する。品詞を、文字通り、parts of speech と理解するなら、それは文の構成要素を意味するものであり、当該の単語が文の部分として、どのような機能を担っているのか、どのような構成要素であるのかを問うことになる。単語の形態論的な特徴は、統語論的な機能に照応して、形づけられているのであり、統語論の形態論に対する優位性が保証される。すべての単語に統語論上の形づけがあるのに対して、形態論上の形づけは語形変化のある単語に限定され、不変化詞にはこれがないことを、その根拠とする。

著者は、当該の単語が、主語や目的語（対象語）になるのか、述語としての使用があるのか、また、述語としての使用がある単語の場合、肯定と否定の双方の用法をもつのか、それとも肯定の用法しかもたないのか、文の主要素となる名詞の規定成分となるのか、述語をになう動詞の修飾成分となるのか、といった文中での、どのような機能をはたす成分となりうるか、という文中での機能を徹底して問っている。対象の単語が述語として用いられるときに、肯定用法と否定用法の両方をもつものと、肯定用法しかもたないものに注目した点は新鮮である。その問いを、自己の内省や手拾いの限られた資料によるのではなく、電子媒体のコーパスに求めたところがこの論文の特徴でもある。電子媒体のコーパスは、大量の言語現象を提供してくれるもので、今日の言語研究には欠かせないものである。水谷・星野による研究は、小説をはじめ、いくつかのジャンルの用例に依拠するものではあるが、それは有意抽出であって、そこからは定量的な分析結果は望めない。しかし、著者の研究の対象は、新聞記事のみではあるが、調査対象が明確であり、随所にほどこされている統計的な処理から現象の分布・かたよりがよみとれる。言語の記述は、定性的でもあり、定量的でもあることが望ましい。本研究は双方を満たしている。

もとより、辞書は言語事実を反映し、規範となるべきものである。しかし、辞書の記述が言語現象を忠実に反映しているという保証はない。著者の報告は、辞書の批判には及んでいないが、結果として、辞書の文法性の記述の問題点を明らかにしたことになる。一方、日本語をめぐって、さまざまな文法論があって、単語をどのような単位と見るか、どのような品詞を日本語の中に認めるのかといった点で、共通の理解があるわけではない。市販の辞書は、おおむね、問題を多く抱えた学校文法にもとづいている。さらに、単語という単位に、さしたる重き



をおかない文法論も存在する。そうした状況にあつて、著者は、単語という単位が、典型的には、固有の語彙的意味をもち、それがあつた文法的な形式(語形)をとつて、文の部分となる性質をそなえた言語の基本的な単位であるにとらえる。西洋の伝統的な文法論である単語を重要視し、文法のかなめに単語をおき、統語論と形態論から文法が構成されるという基本姿勢が感じ取れる。伝統的な国文法の世界では、西洋の言語学でいうところの word ではないものを単語としてきた。日本語文法の世界では、単語と形態素の区別があいまいで、単語という単位が正當にとりあつかわれてこなかつた。著者は、松下大三郎や鈴木重幸の提唱する、単語に対する考えに共感をしめし、この立場にたつて、研究を進めている。第五章は、単語と品詞をめぐる、著者なりの日本語文法史を素描したものである。

この論文の特徴は、対象にした各単語の文法的な性質を、多くの実例から考察をくわえた点である。著者は、実例を重視し、言語の実際の使用から客観的な結論をみちびくという、研究の姿勢をつらぬいている。こうした言語事実の実証的な記述は、研究の客観性を保証するものであり、かつ、特定の言語現象にかたよることなく、大量の事例をあつかつており、提示された調査結果は、今後の辞書編纂や言語教育(学習)にも有益であり、そのための貴重な資料を提供しているといえる。

ところで、本論文には、「様態・量(空間・時間・頻度)・程度」を意味する語彙の文法的特性」と題するものの、なぜ「様態・程度・量」をとりあげたのかという言及が欠けている。また、品詞の認定に際して、意味論的な基準では、品詞の分類ができないと結論づけているが、はたして意味は品詞の分類になんら関与しないものか。文法的な特性を背後から支えているものは、実は単語の意味的な特徴なのでないかといった疑念が生ずる。「様態・量・程度をあらわす語彙」というテーマには、意味的な特徴づけがなされている。著者は、当該の単語の文法性(とりわけ統語性)に注目するあまり、意味的な側面に目をふさいでいるようである。単語が語彙=文法的な単位とみる立場をとりながら、意味的な側面を無視もしくは軽視するのは問題ではなからうか。

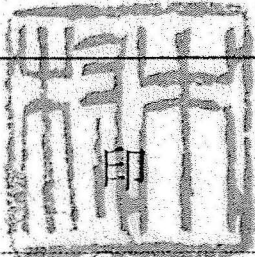


著者の研究に関連する領域に対する理解はおおむね確かであり、日本語学(語彙論・文法論)に通じていることが随所にうかがわれる。論文は全体の構成において確固たる形式を整えている。専門用語の使い方もおおむね妥當であり、特に問題はない。

本論文は、博士(日本語日本文化)(同志社女子大学)の学位論文として十分な価値を有するものと認める。



試 問 結 果 の 要 旨

2010年2月 2日

学 位 申 請 者	森下 訓子		
審 査 委 員	主 査	村木新次郎	
	副 査	吉野 政治	
	副 査	石井 久雄	
<p>審査員3人は、2010年2月2日午前10時から、学位申請者森下訓子氏に対し、本論文に関する公開の試問を行なった。はじめに、申請者による口頭での論文要旨の発表があり、続いて審査員から数々の質疑が出された。審査員の質問や疑義に対して、申請者は概ね的確な回答をした。新聞コーパスの是非をめぐって、品詞論をめぐって、事実の報告と整理の仕方をめぐって、総論と各論のあり方をめぐって、審査者と申請者の間で議論が展開された。回答を通して、申請者が日本語の言語現象に対して深い理解と見識をもっていること、事例を鋭く分析する能力を備えていることが確認された。よって、本論文の提出者森下訓子氏が博士（日本語日本文化）（同志社女子大学）の授与に値する十分な学力を有するものと認める。</p>			